

教育相談ファシリテーター になろう!

1

教育相談ファシリテーター になろう!



株式会社ひとまち 代表取締役
日本ファシリテーション協会 フェロー

ちよん せいこ

ホワイトボード・ミーティング®開発者。
効率的、効果的な会議の普及で、ひとや
まちが元気になる社会をめざしています。

みんなで、ファシリテーターになろう!

こんにちは。ちよんせいこです。今月から、新しく連載をスタートします。

私の仕事は、ファシリテーターの養成です。ファシリテーターという言葉は、ずいぶん浸透してきましたが、具体的な技術普及は、まだまだこれからの領域です。みなさんには、ファシリテーターの練習経験がありますか。

そもそも、ファシリテーターの役割は、会議や授業、研修、行事など、複数の人が集まってプロジェクトを進めるときに進行役です。一人ひとりの力をエンパワーしながらゴールに向かって共に歩むパートナーであり、協働者。専門的には中立、公平、対等な立場が求められます。でも、これって難しいですよ。だから練習が必要です。

私は、ホワイトボード・ミーティング®という話し合いの手法を開発し、学校をはじめ企業や病院、福祉施設、役所やボランティア活動などの場で、効率的・効果的なチーム活動を進めるファシリテーション技術の普及を進めてきました。その中でも、特に深くかかわりをもったのが学校と福祉現場です。具体的には、授業の指導やケース会議のスーパーバイズに取り組んできました。なので、私の提案の特徴として、「教室で不適応を起こして困っている子」や「クラスの子どもたちの対立関係」などの改善策としての、

授業や学級活動の「具体的な進め方」の提案があります。そのベースとなるのは、先生や子どもたちがファシリテーターになることです。

特に子どもたちがファシリテーターになるプロセスは、教室に「主体的、対話的で深い学び」を構築します。教育相談を要する子どもたちにとっても、授業で友達との対話が安定し、温かい関係を紡ぎ、笑ったり、泣いたりしながら成長するプロセスを育みます。

この連載では、これまでの経験から学んだノウハウをシンプルにお伝えします。そして「チーム学校」としての機能充実をめざして、教育相談ファシリテーターになろう！と、呼びかけます。

ファシリテーションは技術です。練習をすると上手になります。毎日の授業や学級活動、面談やスクールソーシャルワークを有機的につなげる教育相談ファシリテーターとなり、幸せな子ども時代と一緒にサポートしましょう。

アセスメント技術を練習しよう



ファシリテーションは六つの技術で構成されます。これらは密接にかかわりあう技術ですが、一つずつを切り分けて練習するのも有効です。この連載では、特にアセスメントを中心に、みなさんと一緒に技術向上に取り組みます。

私が最初にアセスメントを学んだ峯本耕治弁護士(TPC

教育サポートセンター代表 は、次のように説明しています。

人の行動には必ず理由や背景があり、それがわかると対応プランが見えてきます。アセスメントとは問題行動を科学的に分析し、その理由(背景・原因・プロセス)を見立てることです。このアセスメントを丁寧に行わないと、子どもの問題行動への対応が対処療法的になり、目の前の「症状」に振り回されてしまいます。先手を打てないし、変化に対応もできない。そのせいで子どもをかわいく思えなくなってしまう。先生自身の精神的負担も増えます。

そうならないためには、アセスメントと合理的なプランニングが必要になります。

〈ファシリテーション6つの技術〉

- 1 インストラクション (説明)
- 2 クエスチョン (質問)
- 3 アセスメント (評価・分析・理解)
- 4 グラフィック&ソニフィケーション (可視化&可聴化)
- 5 フォーメーション (隊形)
- 6 プログラムデザイン (設計)

〈引用文献〉 ちよんせいこ他『ファシリテーターになろう!』解放出版社、2014年

ホワイトボード・ミーティング®には「ホワイトボードケース会議」という会議フレームがあります。この連載でも紹介をする予定ですが、関係者が情報を持ち寄り、子

〈引用文献〉 ちよんせいこ『ちよんせいこのホワイトボード・ミーティング』小学館、2015年

どもの見立てを一致して合理的なプランニングを立て、役割分担を進める効率的・効果的な方法です。

しかし、現場はケース会議を開いている時間もないほどに忙しく、バタバタと日々が流れます。瞬時にアセスメントをしてかわり方を決める場面もたくさんあります。

日頃より適切なアセスメントをして子どもにかかわっていると、不要な問題行動を回避して、効果的な言葉かけや支援ができます。アセスメントが不適切だと、さらなる問題行動や混乱を誘引してしまいます。

あるホワイトボードの授業でのアセスメント

気軽に書いたり、消したりできるホワイトボード。子どもたちが大好きな教具です。教室ではクラス全員にミニホワイトボードを配付して、意見表明や試行錯誤のツールとして活用します。

小学校二年生のクラスにゲストティーチャーとして招かれたときの様子です。

この日、子どもたちはホワイトボードデビュー。まつさらのホワイトボードに「早く書きたい」気持ち満々です。「では、なんでも好きに書いてください。ポケモンやすみっこぐらしもオーケー。漢字や数字を書く人もいます。文字でも絵でも自由にどうぞ」の声に、三〇人の子どもたちが嬉しそうにマーカーのキャップを取り、書き始めます。そ

の中に、掛け算を書く子がいました。九九表なのですが九の段を飛び越えて、一二の段まで書き続けています。

「はい。五分たちました。終了です。では、ダダンの合図で見せてください」と声をかけると、子どもたちは、これまた嬉しそうにホワイトボードを掲げます。「上手だねえ」と声をかけつつも、その子はまだ、掛け算を書き続けています。結局、次の活動に入らず、他の子から遅れること五分ほどたった頃に、「できたくー！」と嬉しそうにホワイトボードを掲げました。そこには、私には暗算できない数字が綿密に並んでいます。

右手でOKの合図をつくってその子に向けてから、他の子たちが次の夢中になる活動へと場面を切り替えて、静かにその子に近づきました。小声で心から「すごいねえ。天才的な計算。じゃあ、消して次の活動に移りましょうか」と声をかけました。すると大きな声で「消したくない！絶対、消したくない！」なるほど、それはそうやんなあ。じゃあ、こうしようか」と、手に持っていたカメラでパチリと写真を撮りました。「OK？」と聞くと、「うん」と笑顔で消し、みんなが取り組んだ活動を一つ飛ばし、次の活動から合流しました。

このときのアセスメントは、次のような感じでした。

①夢中になると止まらない。まわりも見えなくなっちゃう。

②でも、掛け算が楽しい！ 大好き！ 得意！

- ③ 一生懸命に書いた掛け算を先生や友達に認めてほしい。
- ④ せっかく書いたものを消したくない！
- ⑤ 集団のスピードに追いつけず、先生の指示に従えない。

そこで対応プランとして、

- ① 無理に止めない。
- ② 楽しい気持ち（強み）を大切にする。
- ③ 小さな声で、素直な気持ちで認める。共感する。
- ④ 写真に撮って残して安心させる。
- ⑤ 集団は待たずに活動を進め、その子は遅れて活動に合流するチャンスをつくり続ける。

アセスメントに正解はありません。きっとよりよい方法は他にもあったでしょう。

しかし明らかな間違いはありません。その例としては、以下のような感じでした。

- ① 次の活動に移れない子に注意し、活動を止めさせる。
- ② 夢中に取り組む活動の制止に子どもは納得できず、
- ③ ホワイトボードペンを投げたりしてしまい、
- ④ その対応の間、他の子どもたち（集団）は待たされ、
- ⑤ その子を注意指導する先生の声も混ざって教室が冷え、
- ⑥ みんなの意欲が低下する。楽しい活動も残念！になる。

どうでしょうか。なんとなくイメージできるでしょうか。アセスメントのポイントは、個人と集団の二軸で考えます。それぞれの強みをつくりだして活かします。

アセスメントは領域ごとの専門技術を伴いますが、日頃から子どもたちも普通に使っている技術でもあります。「この子はやさしく話してくれるから、放課後、遊びに誘おう」「この先生は話を聞いてくれないから、適当に返事しておこう」など。子どもたちも友達や周囲の大人をアセスメントしています。

その意味で、アセスメントは、普遍的な自己と他者との関係を理解する「読み取りの技術」でもあります。

POINT
ワンポイント・レッスン

ミニホワイトボードの教室での進め方

〈準備〉
・ミニホワイトボードと黒のマーカーを全員に配付する。
・机に常備して、いつでも子どもが使えるようにしておく。

〈進め方〉

- ① 先生が簡単なクイズを出す。
- ② 全員が答えを書いて、「タタタ」の合図で見せる。
- ③ 先生が読み上げる、あるいは全員に対しOKを出す。
- ④ 慣れてきたら、先生の役割を子どもに渡す。

〈引用文献〉 ちょんせいこ『ちょんせいこのホワイトボード・ミーティング』小学館、2015年